慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アダム・スミス生誕二百年記念会出陳書目
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1923
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.17, No.7 (1923. 7) ,p.1296(322)- 1339(365)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	アダム・スミス生誕二百年記念号 雑報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19230701-0322

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

安食　高吉　三邊　金藏　金原賢之助

猶ほ、アダム・スミス關係文書展覽會は之を本塾圖書館に於て開催、六月四日より十日迄一般の觀覽に供したり。陳列文書は第一部スミスの著書、第二部國富論に引用せられたる著書、第三部スミスに關する著書、第四部第十七、八世紀に於ける主要なる經濟文書となし、其數實に數百冊に上れり。就中國富論は、初版は勿論其各版各種版本等殆んど總てを網羅して六十餘種を數へ、入場者の注目を惹けり。其他古書珍本頗る多く一々枚擧に遑なき程なり。出品書類の多くに附せられたる解題書は之を集めて本誌別項に載せたり。右文書と共に國富論初版、ダブリン僞版のタイトル・ページ、スミスの各種肖像、生家、墓碑等の寫眞數十葉を陳列して觀覽者の興を添へたり。

尙ほ、本展覽會を催すに當りて所藏書籍寫眞其他を貸與又は寄贈せられたる高橋誠一郎、小泉信三、板倉卓造、增井幸雄、御木本隆三、小野英二郎、榎本鎭治、高木壽一の諸氏には玆に深く其好意を感謝する次第なり。

アダム・スミス生誕二百年記念會出陳書目

一、アダム・スミスの著書。
二、國富論中に引用せられたる諸著。
三、アムダ・スミスに關する著書。
四、第十七、八世紀に於ける重要なる經濟書。

（目中特に所藏者氏名記載なきものは本塾圖書館の所藏に係るものなり。）

一、アダム・スミスの著書

Wealth of Nations, London 1776 2 vols.

國富論初版　上卷は第一第二第三編より成り總て五一〇頁、下卷は第四第五兩編を收め五八七頁。前グラスゴー大學道德哲學教授法學博士學士會員アダム・スミス著と銘し、上頭に總目次を掲ぐ。價格一磅十六志。

Wealth of Nations, Dublin, 1776. 3 vols.

國富論初版上梓の年、早くもダブリンに於て翻刻出版せられしもの。版權侵害と覺し。

Wealth of Nations, 2d ed. London, 1778. 2 vols.

目次を上下兩卷に分載せる外體裁初版と大差無きも、辭句の修訂、脚註の激增、數字の補正、特に利潤地代の發生に關する一部學說の變更等、內容の改竄尠からず。價格二磅二志。

Wealth of Nations, 3d ed. with additions, London, 1784. 3 vols.

重要なる增補を見る「マーカンティル・システムの結論」「商業の特殊部門の便宜の爲め必要なる公共事業並に公共設備に就いて」等の諸節、及び對佛貿易制限の不合理、戾稅、鰊魚業奬勵金、穀物奬勵金等の諸件に關する論述は、其最も顯著なるものなり。索引を添ふ。

Additions and Corrections to the First and Second Editions of Dr. Smith's Wealth of Nations, London, 1784

國富論第二版及第三版に於て行へる大小數條の增補修訂を一括收錄し、以て前版購讀者に便せるもの、公刊にあらず。

Wealth of Nations, 4 ed. 1786, 5 ed. 1789. 6 ed. 1791, 7 ed. 1793, 8 ed. 1796, 9 ed. 1799, 10 ed. 1802, 11 ed. 1805, 12 ed. 1812, New ed. Glasgow, 1805.

右の內第四第五兩版はスミス生前の刊行なるも毫も特筆す可き變移無く、著者易簀後第十版に至るまでは唯だ版を重ぬるのみ。第十一版に於て始めて W. Playfair の著者略傳、緒論、並に評註を添付す。

Wealth of Nations, 4 ed. with additions. Dubbin 1785. 2 vols.

Wealth of Nations, 6 ed. with additions. Dublin 1801. 2 vols.

Wealth of Nations, Basil, 1791. 4 vols.

共に倫敦版を翻刻せるものと覺ゆ。其他著名の校訂者を有する諸版本を枚擧すれば

Wealth of Nations, edited with notes and additions by David Buchanan. Edinburgh, 1814

Wealth of Nations, edited with life, introduction, notes, and supplement, by J. R. M'Culloch, 1828, 1839, 1850, 1855, 1861, 1872

Wealth of Nations, edited by Thorold Rogers, 1869, 1880

Wealth of Nations, with introductory essay and notes by J. S. Nicholson. London etc. 1884, 1886

Wealth of Nations, with notes and introduction by E. B. Bax. London 1887, 7 ed. 1913

Wealth of Nations, edited by W. Enfield London, 1809

Wealth of Nations, edited with notes from Ricardo, M'Culloch, Chalmers, and other eminent Political Economist by E. G. Wakefield, with life of the author by D. Stewart. London, 1843

Wealth of Nations, with introductory essay by Seligman. London, 1910.

Wealth of Nations, edited with an introduction, notes, marginal summary and an enlarged index, by E. Cannan. London, 1904, 1920.

就中キャナン版は卷頭校訂者の序論に於て、スミス生前に於る「國富論」諸版本の異同、同書とグラスゴー大學に於るスミスの法學講義案との關係、佛國經濟學者並に英本國に於る先驅者のスミスに與へたる影響等に就き、有力なる考察を披瀝し、加ふるに註解頗る周密に

欄外の摘要亦懇切を極む。方今最も世に行はるゝ所以なり。

又ガルニエー佛譯本に掲ぐる「國富論研究便法」其他を翻譯添付せる英國版次の如し。

Wealth of Nations, Edinburgh, 1806, 1809, 3 vols.

Wealth of Nations, London, 1811, 1812. 3 vols.

Wealth of Nations, London & Edinburgh, 1817, 1819. 3 vol.

Wealth of Nations, Edinburgh, 1831, 1835, 1836, 1838, 1839. 1 vol.

Wealth of Nations, London & Edinburgh, 1845, 1847, 1848. 1 vol.

其他の諸版に

Wealth of Nations, from the 11. London edition with notes and supplementary chapters by W. Playfair, andan account of Dr. Smith's Life by D. Stewart. Hartford, 1818. 3 vols.

Wealth of Nations, with a life of the author, etc. London & Dublin, 1825. 3 vols.

Wealth of Nations, London 1835-40 4 vols.

Wealth of Nations, New ed. Edinburgh 1863, 1 vol.

Wealth of Nations edited by A. Murray. New York, ed. 1875. 1 vol.

等あり。尙抄本の類には

J. Joyce: A complete Analysis or Abridgement of the Wealth of Nations. London, 1818.

J. W. Ashley: Selected Chapters and Passages from the Wealth of Nations 1776, New York & London, 1895.

あり。轉して國富論の譯本を檢するに次の如し。

佛譯本

Richesse des Nations, Trad. nouvelle, avec des notes et observations par G. Garnier, Paris 1802, 5 toms.

佛蘭西に於る最良譯を以て許さる。譯者ガルニエーは是に有名なる「國富論研究便法」を揭げ、且つ周密なる註解並に索引を添付せり。該研究法を英譯掲載せる版本多きは、既に紹介せる所なり。

Richesse des Nations, Paris 1843, 2 Toms. (Collection des Principaux Économistes, Tom. V-VI)

ブランキーがガルニエーの佛譯本を基礎とし、其註に適宜削減を施し訂正を加へ、添ふるに著者の傳記、ブカナン、ガルニエー、マカロック、マルサス、ジェームス・ミル、リカアドオ、シスモンディ諸家の評註、セーの未公表の評註、並に編者の史的解説を以てせるもの。ギョーマン經濟學叢書の第五卷及第六卷なり

Richesse des Nations, Paris (Petite Bibliothéque Économique Française et Etrangère, 5)

佛蘭西内外經濟學小叢書の一部として譯出せられるもの。

獨譯本

Der Reichtum der Nationen, übers. Von Stöpel, Berlin, 1905.

Der Reichtum der Nationen, nach der übers. von M. Stirner u. der englischen Ausg. von Cannan hersg. von H. Schmidt, Leipzig, 1910.

前者はストエペルの譯本、後者はスティルネルの獨譯本とキャナンの英國版とに從ひて、シュミットの編纂せるものなり。

邦譯本

國富論　全三卷　石川暎作譯　明治十七年發行

國富論抄本　全一卷　三上正毅譯　明治四十三年發行

アシュレーの拔粹本を翻譯せるものなり。

國富論　竹内謙二譯

第一卷　大正十年發行

第二卷　大正十一年發行（以下未刊）

Theory of Moral Sentiments, Bohn's Standard Library, London 1907, 1911

スミスの倫理學上の思辨を披瀝せるもの。初版は一七五九年、即ち彼れがグラスゴー大學教授に就任後九年にして表はる。何等の文獻無くして既に其名聲を蘇國の一般社會に博しつゝありしスミスは、此書の上梓と共に當代第一流の著作家中に位するの世界的承認を得たりと傳ふ。本版には卷頭に D. Stewart のスミス傳を添へたり。

Essays on Philosophical Subjects, edited by J. Black & J. Hutton, to which is prefixed an Account of the Life and Writings of the Author by D. Stewart, London 1795

スミスの沒後、其遺言執行人たる Black, Hutton 兩者が、彼れの哲學的思辨の諸斷片を蒐集上梓せるもの。完全なる社會哲學の體系を組織せんとして半途に挫折せる、スミスの宏圖の一端を窺知す可し。編纂者の發刊の辭、並に D. Stewart のスミス傳を添ふ。

Lectures of Adam Smith, edited by E. Cannan. Oxford, 1896.

グラスゴー大學に於るスミスの法學講義案にして、一七六三年當時の一學生の手記を翻刻せるもの。卷頭編者キャナンの考證に明瞭なるが如く、本講義案の發見上梓は D. Stewart のスミス傳の一齣と相俟つて、國富論の萠芽が夙に外遊以前のスミスの胸奥に胚胎せし所以を立證し、以て其學説を專ら佛國經濟學者

の恩惠に歸する妄評より著者を解放するに有意義なり。

最後にアダム・スミス全集として刊行せられしもの次の如し

The Whole Works of Adam Smith, with an Account of His Life and Writings by D. Stewart, London 1811-12

Vol. I. Theory of Moral Sentiments
Vol. II-IV. Wealth of Nations
Vol. V. Essays and Life

The Whole Works of Adam Smith, a new edition with a life of the author, London etc. 1822

Vol. I. Theory of Moral Sentiments
Vol. II-IV. Wealth of Nations
Vol. V. Essays

以上國富論六十七種、道德的情操論三種、哲學諸論三種、法學講義案一種、通計七十四種なり。

二、國富論中に引用せられたる諸著

（本書目排列の順序は大體に於いて Cannan 版國富論第二卷々末 Index II に據れるものなり）

Anderson, Adam— Historical and Chronological Deduction of the Origin of Commerce. London, 1764.

Anderson は蘇格蘭の人、南洋會社に職を奉ずる事四十年に亘る。本書は彼が唯一の著書にして特に大不列顛及愛蘭の商業を年代記形態に於いて記述せる勞作なり。アダム・スミスは本著者を評して「眞摯聰明なるアンダーソン氏」と記し國富論中屢〻史的證左を引用し殊に外國貿易會社を論ずるに當りては其史的根據を殆ど全くアンダーソンに據れり。

Aristotle— Politics.

本書は近世政治哲學の發展に直接の影響を及ぼせしものにして、人間社會の起原、要素構成及狀態を眞に科學的に論議したる最初のものとして又希臘の歷史的事實に關する豐富なる知識として二重の價値を有するものと稱せらる、而して所謂經濟に關する彼の見解は「本書」第一編に發見せらる、

Berkeley, Dr. George— Querist. London, 1752.

著者は愛蘭 Cloyne の僧正、十八世紀の初期經濟的研究の沈滯を破りしものは實に彼の著述なりき。彼は多少の誤謬を犯さゞるに非れ共も本書に於いて國富の本質及貨幣の職能に關してマーカンチリストの迷蒙を排せり。而して其富及福祉の哲學的考察に於いては既にアダム・スミスを豫見せしむるものあり。本書の初版は一七三五年より三七年に亘り三編に分たれて出版せられ、一七五〇年に現はれたる再版には多少の增補と共に數多の問題の削除せられしものあり。此再版に於いて削除せられし部分はフレザー教授によりて編纂せられしバークリイ著作集第三版附錄に掲げらる。

（小泉信三氏藏）

Bernier, François— Voyages.

著者（一六二五？—一六八八年）は佛蘭西の醫師にして旅行家なり。本書は彼のムガール帝國、ペルシヤ、印度方面への旅行の記錄にして歐人の手になれる東洋旅行記中初期の部類に屬するものなり。（陳列せられたるは本書の英譯本なり）

Blackstone, William— Commentaries on the Laws of England. 1765-69.

著者は英國の法律學者にして、彼の永久的價値を有する唯一の仕事は本書を殘せしに在り。本書はもと四卷より成り、一八五四年迄に二十三版を重ね其他數多の著述家の手になれる諸版本なり。而して英國に於いては今尙法律研究者の參考に供せらるゝものなり。

Cantillon, Richard— Essai sur la Nature du Commerce en général. 1755.

著者はジョン・ローの畫策時代に聰明なる行動によつて巨萬の富を致せる愛蘭出身の巴里の銀行家、本書は英語にて書かれしものを彼自らが佛國の友人の爲めに飜譯したる論文にて其始めて上梓せられしは一七五五年に過ぎざれども久しく寫本として流布せるものなりき。本書が後年のフヰジオクラートに對して多大の影響を與へたるの事實は何人も異論なき所にしてかの有名なるミラボーの「人間の友」は本書に據れる部分大なり。加之ケネーの、經濟表」及スミスの「國富論」の或部分が此書によりて暗示を受くること大なりし事も亦疑なき事實なり。本書は第一部に於いて外國貿易を論ぜり。彼の著はマーカンチリストのそれとは異り有ゆる時及場所に於いて富の科學を支配する根本原則に關し廣汎且つ哲學的なる見解を與へしものにして en général なる文字は即ち最も注意すべきものなり。（陳列せられたるは一八九二年ボストンに於いて出版せられたる本書の飜刻版なり）

Child, Sir Josiah— New Discourse of Trade London, 1693.

本書は彼が一六六八年 J. C. の首字をのみ掲げて出版せる「貿易及び貨幣利子要略」を增補改題したるものにして其の初版の出版は一千六百九十三年の事なり。

Cicero— De officiis.

著者は羅馬共和時代最後の大政治家にして本書は人間の義務に就いて論じたるもの彼の有名なる著述の一なり。彼の哲學的論文の多くは對話の形式を有すれ共、本書は然らず。極めてストア學派的傾向を有するものにして第一及第二論は Panaetius の著作、第三編は Posidonius Hecato の著作より材料を取り入れたるものなり。

Davenant, Charles— The Political and Commercial Works of that celebrated Writer Charles D'Avenant, edited by Whitworth, London, 1771.

Davenant は博識宏辯、其の意見は往々奇警卓拔を以つて稱さる、彼の諸書はあらゆる經濟上の諸問題に亘りて論議し殊に貨幣と富との差異を明快に區別す、（即ち金銀は交易の尺度なるも其の源泉及び根元たるものは一國の天然若しくは人爲の所產にして、貨幣は交易の從僕たるに過ぎず一國にとりて眞正有効なる富は其の國產なり貨幣は交易の招致するところにして交易を招致するものに非ずと論ぜり。）ダヴェナントの議論の中心點は貿易平衡論にあり。公債を以つて戰費に充つるを非難し內國消費稅を最公平なる租稅なりと主張せる「戰費調達の手段方法に關する一論」は彼の政治經濟上に於ける初著にして最も好評を博せしものなり。

Dutot— Réflexions politiques sur les Finances et le Commerce, ... 1754

著者の評傳は確ならず唯ジョン・ローの印度會社の出納係なりしと稱せらる。彼の著書は一七一八—三八年に二卷として出版せられしが一七四三年及び五四年飜刻に附せられ、而してギョーマンの全集にも收めらる。此書は貨幣の購買力の增減が國庫收入、商品の價格、外國爲替並に貿易に及ぼす影響如何を論じたるものにして、スミスは其國富論に於いて貨幣及公債に關して本書に論及せり。

Gee, Joshua— Trade and Navigation of Great Britain considered. London, 1729.

Gee は第十八世紀初葉の英國商人にして商業及工業に關する數篇の著書論文あり。殊に本書に於いては一國民にとりて富の增進を計らんがため最良の方法は自國に產し得べき外國貨物の輸入を防止するにあるを力說せり。

彼には尙羊毛工業及羊毛貿易に關する三著書あれどもスミスが引用せるは本書のみなり（國富論第一編第九章）（高橋誠一郎氏藏）

Grotius— De jure beli et pacis. 1624

著者は有名なる和蘭の法學者にして本書はその主著にして國際法を論ずるものなり（陳列せられたるは一八六七年巴里出版になる佛譯本全三卷にして板倉卓造氏藏なり）

Harris, Joseph— Essay upon Money and Coin. London, 1757-58.

著者の學風は所謂マーカンチリズムに反するものにして、土地及び勞働を以つて國富の源泉と認め、リカードオに先立つて價値の尺度は勞働量なりと論せり。又貨幣に關する彼の意見は嘗てマッカロックをして貨幣に關する最良書なりと云はしめたる程にて、頗る價値あり、而して彼は單本位論を持して、何れの國にても一種の金屬のみ貨幣たり得べしと論せり。彼の貨幣論は專らアダム・スミスの國富論第一編第四及第五章に引用せらる。

Hobbes, Thomas— Leviathan, London, 1651.

ホッブスは「權力は正義なり」との教義を宣明したる最大の近世的使徒にして彼は其政治哲學中に於いて幾多の經濟論を表明せり。然れ共彼は未だ經濟學の獨立科學たる事實若しくは政治哲學中に於ける一部門たる事實を認めざりしも近代の經濟學中に編入せられつゝある諸點の殆んど全部を包容せんとするの觀あり。例へば價値及び價格、分配及び交換等經濟學上に於ける名詞の定義に關說せるが如し。アダム・スミスは「國富論」第一編第五章に於いてホッブスの言たる「富は力なり」を引用せり（小泉信三氏藏）

Homer— Iliad.

—Odyssey.

作者は嘗に希臘の大詩人たるのみならず、又叙事詩に於いては古今に肩を比ぶるものなしと稱せらる。二書は共にトロイ戰爭に於ける英雄を取扱ひ、前者はアキリーズの憤怒を主題とし、後者はオーデシウスの冒險を其主題とす。二書共に希臘人に關する記述に於いて、アダム・スミスの「國富論」中に引用せらる

Hume, David— Political Discourses. Edinburgh, 1752.

ヒュームは經濟學の可能性を信じ其主題を敍述せりと雖も、而も終に其名辭を用ふる事なくして止めり。本書中に於いて取扱はれたる題目は商業、技術の精練（奢侈）貨幣、利子貿易の平衡、貿易上の嫉妬、租稅及び公信用にして、多く皆政治家的見地より觀察せられたり。彼は實に經濟學が政治哲學より發生せんとするに際し猶も其の過渡の階段を代表せる者たりと雖も、是等斷片的なる論文中には一貫せる思想の脈絡ありて或る意味に於いては經濟學の體系を構成するものとも稱するを得可し。ジェー・エッチ・バートンは本書を指して「經濟學の搖籃」と云へるが彼の親友にして後輩たるアダム・スミスが「國富論」は此搖籃裡に育成せられたり。ヒュームは純正哲學に於けると等しく經濟學に於いても亦獨創敢爲にして且效果大なる建設者たりしなり。（高橋誠一郎小泉信三兩氏藏）

Hume, David— History of England. 1772

本書はヒュームをして有數なる史家の一人たらしめしものにして、先づ筆を太古に於けるシーザーの英國侵略に起して、ジェイムス二世の廢位即ち名譽革命に結ぶ　本書はスミス「國富論」に引用せらるゝこと甚だ多し。（陳列の本）

書は一八七六年フイラデルフイア新版なり）

Hume, David— Essays, Moral and Political. Edinburgh, 1748.

本論集は諸論文集の第一部にして一七四二年に初版を出したり。本論集はスミスの「國富論」中に引用せらるゝこと甚だ少なし。

Hutcheson, Francis— System of Moral Philosophy. London, 1755.

本書の出版せられたるは著者の死後即ち一七五五年なりと雖も其の成れるは一七四二年なり。ハッチェソンは所謂功利主義的倫理學説の創唱者の一人にして、彼がグラスゴー大學に於ける講義はアダム・スミスに甚大なる感化を與へたり。本書は貿易の平衡、國家的制規及び人口等に關しては猶ほ幾分マーカンチリスト流の思想を有するも、然かも後年グラスゴー大學に於ける其の講座の繼承者アダム・スミスが其の「國富論」中に表明せる諸理論を豫示する幾多の章句を包有するなり。

La Rivière, Mercier de— L'Ordre naturel et essentiel les Sociétés politiques. Paris, 1767.

此の書はフヰジオクラシイの見解を以て國家哲學の體系を立てんと試みし大著なり。其前半二十六章は政治哲學を説き後半十八章は經濟論を叙述す。フヰジオクラートの中心學説の最も明確なる説明は之を此の書中に求むるを得べし。或ひはモンテスキューの「法の精神に就いて」以上の名著なりと推稱するものあり。（増井幸雄氏藏一九一〇年版）

Law, John— Money and Trade, Considered with a Proposal for Supplying the Nation with Money. Edinburgh, 1705.

本書は最初蘇格蘭議會及英國首相に建言せしものにして世に公にせられしは一七九〇年也里に於いてなり、而して彼は純然たるマーカンチリストの立場より一國産業上貨幣の必要なる所以並びに此の必要なる貨幣の供給を増加せしむる方法を論じたり、アダム・スミスは其の「國富論」中に屢〻ローの所説を引用せり。因に本文はロー自らに依つて佛譯せられたりと云ふ。

Locke, John— Civil Government.

本書は一六八八年の革命原則の哲學的擁護論にして其内容はホヰッグ黨の綱領の説明と認めらるゝに至れり。社會の基礎は自由及財産擁護のための契約なりとせる其の見解は民約論に於けるルソーの思想の先驅をなせるものなり。

Locke, John— Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest and Raising the Value of Money. London, 1692.

ロックは第十七世紀末英國に於ける利子論爭史上に特筆す可き人なり、本篇中其の三分の二を占むる利子低減論は凡そかの Exchequer の閉鎖せられたる一六七二年の交に成りしものにして一六九〇年彼は之れに貨幣陞價論を加筆し九二年匿名の著として公刊せるものなり。本著は其の表題に於いては利子低減及び貨幣價値陞高の結果を論じたるものに過ぎずと雖も或程度迄經濟學の一般原理に關する汎論たるの性質を具有するものなり。（高橋誠一郎、小泉信三兩氏藏）

Locke, John— Further Considerations Concerning Raising the Value of Money. London, 1695.

本書は同年に刊行せられたる他の一冊子 Some Observations on a Printed Paper と共に William Lowndes の銀貨改鑄に關する建議に對する論駁にして著者は此等の著に於いて一六

九二年の彼の所論を更に一層强調せるものなり（高橋誠一郎、小泉信三兩氏藏）

Lowndes, William—Some Remarks on a Report Containing an Essay for the Amendment of the Silver Coins. London, 1695.

著者は一六九五年を以て Secretary of Treasury に任官せられたる人なり、焦眉の急に迫れる貨幣改鑄に資するがために通貨の現狀を調査す可き旨を命せられ、此の結果は軈て本著となりて同年九月出版せられしものなり。

Machiavelli, Niccolò— Discorsi sopra la Princa deca di Tito Livio. Firenze edition, 1887.

著者はフロレンスの零落せる貴族の家に生れ政治家兼文學者として有名なる事大思想家なり、マキアベリズムの名によつて廣く世に知らる。本書は一五一六年の交に草せられしものなり。

Machiavelli, Niccolò— History of Florence.

本書は著者が Cardinal Julius（後の Clement VII）の命を受けて執筆し一五二五年 Julius に提出したるものなり。マキアヴェリに特色なる明晰豪快なる思想は此の熟達せる歷史的研究の中に最も良く表はるゝと言はる。（陳列の本書は一八七二年のロンドン版なり）

Mandeville, Bernard de— Fable of the Bees. Fifth edition, London, 1728.

著者は和蘭に生れ醫師を業とせる諷刺作家。後に英國に來住す、本著の基礎をなせる英詩 the Grumbling Hive は一七〇五年六片の小册子として刊行せられしが次いで一四年に初めて前記の表題を以つて An Enquiring into the Origin of Moral Virtue 並に幾多の備考を附して刊行せられ其後版を重ぬるに至れり。アダム・スミスは既に「道德的情操論」に於いて本書の道德觀を批判せり。

Melon, J. F.—Essai Politique sur le Commerce. Paris, 1734.

十八世紀の前過半經濟思想界に於ける停滯不振の時代にありて僅かに其の空虛を滿すものの一は即ち John Law の祕書たりしムロンの本書なり。此書に於いて吾人はマーカンチリズムの影響を受けたる幾多の形跡を發見し得るも然かも彼は現時に於いて了解せらるゝが如き保護制度を主張することなく且消費者の利益は生產者のこれに優れるの事實を知悉せり。初版は檢査官より頒布禁止の命を受く。

Mirabeau, Vict. Riquetti, Marquis de—Philosophie rurale. Amsterdam, 1763.

ケネーと共にフヂオクラートの基石を爲す。此の書は彼の尙農主義的見解を最も完全に叙述せるものにして「あらゆる彼の著書中の最上若しくは最も少く惡しきもの」との評あり。ケネーに負ふ所多く其の第七章全部は彼の草する所と稱せらる　ケネーの「經濟表」を稱讃せるミラボーの言葉は著明なるものにしてスミス國富論中フヂオクラート批評に就いて引用するところなり

Montesquieu—Esprit des Loix. Geneve, 1748.

此の書はモンテスキユーの主著にして經濟學上に於いてはマーカンチリズムより自由主義に至る過渡期の產物と見るべく其の所論には時代に先行せる所ありと認めらる。此の書に於ける彼の貨幣、利息、商業等の歷史並びに希臘人の敎育、道德觀に關する知識はスミス國富論中に引用又は批評せらるゝ所なり。

Mun, Thomas—England's Treasure by Forraign Trade. London, 1664.

マーカンチリストの「プリンス」と稱せらる

るマンの此著は國家にとりて致富增貨の常道は外國貿易にありと論ずるものなり。東邦印度會社の地金輸出に關する論爭はマンの子ジョン・マンをして父の死後二十三年を經てこの書を出版せしめたり。本書は第十七世紀前半に於ける最も進步せるマーカンチリストの立脚地を表明すると共に其の時代の一般的經濟思想界の狀態を物語るものなり。アダム・スミスが國富論中に引用せる地金輸出禁止に反對するマンの言葉は最も著名なるものなり。

Newton, Sir Isaac—Representation to the Lords of the Treasury. 1717.

十七世紀末に於ける英國貨幣制度の紊亂は Halifax 卿の貨幣改鑄を中心として當時の識者間に貨幣論爭を惹起するに至らしめたり、ニュートンは此の改鑄に際して Chancellor of the Exchequer の下に造幣局長たりし人、本書は貨幣鑄造に關する彼の報告並びに建策なり（陳列の本書は M'Clloch 編纂の Select Collections of Scarce and Valuable Tracts on Money, 1856 に收められたるものなり）

Petty, Sir William—Political Arithmetik. London, 1690.

ペティーは屢〻自由貿易論者と稱せらるれども、彼の所論中にはマーカンチリスト流の色彩あるを免れず。主として過渡時代の思想を代表するものと觀るべし。土地及び人口が國富の資源なりとは當時の賢哲の間に抱懷せられたる思想なるも之れに政治算術を適用せる點はペティーの創意と見るべし。土地及其の所產並に貨幣勞銀及人口に關する徹底的調査なくしては「貿易は人の思索を用ゆべく餘りに推測的の業なり」と主張せる點は彼が從來のマーカンチリストと選を異にする所以なりと稱せらる。

「政治算術」に於いてペティーは當時英國々運衰微せりとの俗論に對し彼の統計學的知識により英國の產業的發展は能く其の覇業を成就せしむべしと觀察せり。政治算術なる語は彼によつて初めて用ひられしもの〻如し。ペティーの國富算定の統計學的方法は近代のそれと本質的に異る所なしと云ふ（高橋誠一郎氏藏）

Petty, William—Verbum Sapienti. London, 1691.

此書は一六九一年「愛蘭土の政治的解剖」の附錄として出版せられたるものなり。稿は一六六五年の頃に成り其の版本の一つには「英國の富並びに費用の算定と最も平等なる方法にて租稅を徵收するの法、云々」の副題を添へたり。其の第一章には土地家屋船舶家畜貨幣及び多樣の貨物の價値を個々に評價し、第二章に於いては貨幣上の名價を以つて算定する事稀れなる國富の一要素「人民の價値の計料」に入れり、第三章は國家收入を對照し、第四章には彼の量定を基礎として租稅分配の方法を論じ、第五章に於いては貨幣及び其の國民經濟上必要なる額を述べたり。（陳列の本書は Political Anatomy of Ireland と合本の分にして高橋誠一郎氏の所藏に係る）

Plato—Republic.

プラトーの名はアダム・スミス國富論中希臘人の教育論に關聯して發見せらる。

Plutarch—Alexander.
—Demosthenes.
—Isocrates.
—Solon.

アダム・スミスは彼の書中歷史的考察に於いて上記の諸書を利用せり。

Quesnay, François— Œuvres économiques et philosophiques. Edited by August Oncken, Paris, 1888.

ケネーはフヂオクラートの中心人物たり。彼の經濟上の主著は「經濟表」（一七五八年）なれ共其の經濟學說の根柢を爲すに至れる社會哲學は既に一七三六年初版を出せる Essai physique sur l'économie animale の中に概說せられたり。Diderat, D' Alembert の百科全書は彼に經濟問題に筆を染むるの機會を與へたるものにして Les Fermiers 及 Les Grains の兩篇は即ち之れに寄稿せられたるものなり。ミラボーの「田園哲學」中に收められたる Maximes générales du Governement économique d'un Royaume agricole は最も簡明に其の主張の骨子を記述し一七六五－六六年著の Le Droit Naturel は其の學說の哲學的基礎を窺知せしむ。

Ralegh, Sir Walter— Works. London, 1751.

彼の經濟論は實際的政治家としての著作にして西班牙の政治的發展、和蘭の商業的繁盛を羨望しつゝ英國の爲めに書かれたるものなり。從つてエリザベス朝に於ける英國の海外發展策はその書中に求むるを得べく又當時の經濟思想をも併せ窺ひうべし。スミスの國富論中ラレーの名は新植民地開拓の項に於いて論ぜらる。

Stewart, Sir James— Inquiry into the Principles of Political Economy. London, 1767.

本書はスチュアートの名聲を大ならしめたる著作にして「經濟學」なる語が英國書に用ひられたるは之れを以つて嚆矢とす。聰明なる著者は長く且つ愼重なる研究によりて本書を著したれども、やがて現はれたるアダム・スミスの「國富論」の强き光に覆はれて多く顧みられざるに到れり、其措辭並に科學的性質は到底スミスに及ばずと雖も尙マーカンチリスト最後の人たる彼の著は少くとも近世經濟學にとりて歷史的興味と價値とを失はざるものなり。傳へ聞く、著者は本書出版によりて五百磅を得たりと。

Uztariz, l'érôme— Theory and Practice of Commerce and Maritime Affairs. Madrid, 1726.

著者ウスタリフは西班牙の人、國王フィリップ五世の臣なり。本書は後一七四二年及五七年に訂正增補版を出す。アダム・スミスが國富論中、銀價の變動及消費貨物課稅を論ずるに當り西班牙の例を引用せるは一七五一年に出でたる英譯本（Kippox 譯）なり。著者は純抽象論に陷る誤謬を匡さんが爲め西歐南歐諸地を旅行して遍く研究資料を蒐集せり、彼はフランスに於けるコルベールの範により强力なる陸海軍とよく制規され保護せられたる貿易によりてのみ西班牙は其舊勢力を挽回し得べしとの根本命題に出發して四個の對策を提唱せり。

Virgil— Georgies.

ヴァジルは西紀前七十年十月十五日に生れ齡五十一才にして逝きネープルスに葬られたる古羅馬の詩聖なり、彼は西紀前三七年－三〇年の七年間 Nola に程近き彼の山莊に於いて此田園詩の製作に沒頭せり、此詩は四篇より成り耕作牧畜樹木殊に葡萄橄欖の栽培、牛馬蜜蜂の飼養を述ぶ。彼の數多き詩篇の中にありても此田園詩は彼の時代に於ける最大の詩人として彼の地位を確立せるものなり。

Voltaire— Siècle de Louis XIV. 1751

著者は經濟學を專攻せる事なしと雖も當時の

常識的經濟論は彼の縱横なる機才を以つて論述せられ、その辛辣なる譏刺の好餌となれるものにかのフォジオクラートあり。

Xenophon — Anabasis.

— Hellenica.

フセノフォンは凡そ西紀前四四四年を以つて雅典に生れ九十餘年の長壽を得て三五五年の頃に逝けりと云ふ　彼は若くして大哲ソクラテスの弟子たりしも生涯を通じて飽くまで實務の人たりしが如し。「アナバシス」は一萬のギリシヤ軍隊がサイラスの指揮の下に其領域を進軍してより彼の死後クセノフォン自らが指揮官に擧げられ其の退却に於いて遭遇せる艱難を事細く叙述せり。

「ヘレニカ」はペロポンネサス戰役の第二十一年なる西紀前四一〇年より同三六二年のアンチネイアの會戰に到るギリシア戰史にして恰もッギディデスの記述の盡くる所に始まれるものなり、クセノフォンの著作は數多けれどもアダム・スミスが引用せるは僅かに右の兩書のみなり。

三、アダム・スミスに關する著書

Bagehot, Walter — Adam Smith as a person. London, 1876.

ラッセル・バーリントン夫人編纂「バヂオットの生涯及著作集」第七卷（一九一五年）中に收めらる。

Bagehot, Walter — Economic Studies. London, 1879.

著者は雜誌「エコノミスト」の主筆として又「ロムバート・ストリート」の著者として有名なり。彼はアダム・スミスを指して國土を發見したるに過ぎずとなし、リカルドオを目して其國土に關して最初の地圖を作成したるものとなし、以てアダム・スミスよりもリカルドオを推奬せり。本書は彼の死後ハットン氏が編輯したる經濟學論文集にして其第三論文は「アダム・スミスと吾が近代經濟學」と題して專らスミスに關說す。

Bastable, C. F. — Public. Finance. London, 1903.

彼の著書として最も傑出し且つ浩瀚なるものなり全編に亘りてスミスに言及する所頗る多し。

Blanqui — Histoire de L'Economic Politique en Europe. Paris, 1837.

彼は最初、セイの指導を受けたるにも拘らず、却て純然たるサン・シモン學徒となれり。本書は其叙述せる所、上古より近世に及び第二卷第三十四章に於て、アダム・スミスを取扱ふ。本書はイー、ジェイ、レオナルド氏によりて英譯せられ一八八〇年ロンドンに出版せらる。

Bonar, James — Philosophy and Political Economy in some of their historical relations, London, 1893.

本書は哲學と經濟學との關係を歷史的に叙述したるものにして、第二編第三章に於てアダム・スミスを取扱ふ。一九二二年第三版の公刊に際し增補をなせしもスミスの章に加筆せる所なし。

Bonar, James — A Catalogue of the Library of Adam Smith. London, 1894.

スミスの藏書目錄にして、スミス研究に資する所多大なりしもの

Bouckle, O. Fred — The Development of Economics. New York, 1921.

著者はペンシルヴェニア州立大學經濟學教授。本書は一七五〇年より一九〇〇年に至る間の經濟學小史にしてスミスに關しては其倫理

學、自然主義、自由放任論、自由貿易論等に論及せり。

Buckle, Henry Thomas— History of Civilisation in England. London, 1857-61.

本書は第二十章の初頭に於てアダム・スミスを論じ研究方法、道德的情操論、國富論の三項に分つ

Cannan, Edwin—A History of the Theories of Production and Distribution in English Political Economy from 1776 to 1848. London, 1893.

本書は表題の示す如く英國に於て經濟學の隆盛を極めたる時期即アダム・スミスよりジョン、スチュアート、ミルに及ぶ時代に就て其學說中最も肝要なる生產及び分配に關する諸學者の所說を敘述評論せるものにして、本書に匹敵すべきもの獨乙、及フランスに於ても稀なりと稱せらる。

Cossa, Lugi— An Introduction to the Study of Political Economy, trans by Louis Dyer. London, 1893.

本書は一八九二年ミラノ出版の伊太利原書をルイス・ダイヤーが英譯せるものなり。書中アダム・スミスに言及する所甚だ多し。

Cousin, Par. M. V.— Cours De L'Histoire de la Philosophie. Paris, 1841.

著者は佛國折衷學派の最も有力なる思想家なり。

Cunningham, William— The Progress of Economic Doctorine in England in Eighteenth Century. London 1891.

本論は英國王立經濟學協會の機關誌たるエコノミック、ジャーナル第一卷七三頁—九四頁に收錄せらる。

Cunningham, William— The Growth of English Industry and Commerce (in modern Times). Cambridge, 1903.

本書は前編を古代、中世の部とし、後編近世の部を分ちて、Mercantile System 及 Laisser Faire とす。本書は其名は商工業發達史なれども其實は英國經濟史の全體に亘る最良の書なり。其所論學者間に異論ある點多く人によりて甚しき批評を加ふるものあれど雖も、少くとも英國の歷史的研究をなす者にして何人も此大著を閑却し得るものなきなり。近世の部の到る處に於てアダム・スミスに關說す。

Delatour, Albert— Adam Smith sa vie ses travaux, ses Doctrines. Paris 1886.

Denis, Hector— Histoire des Système Economiques et Socialistes. (Paris 1904)

論ずる所フィジョクラートよりアダム・スミスに及び第二章に於て專らスミスに關說す。

Dowell, Stephen— History of Taxation and Taxes in England from the Earliest Times to the Year 1885. (London 1888)

ドオウェル氏の本書は筆をノルマン英國征服以前に起し中世、近世を通じて各種の租稅及租稅制度を詳細に、四卷千五百頁餘に亘りて說明せるものにして英國租稅及租稅制度の研究中最も著名なるものの一なり

Dühring, Eugen Karl— Kritische Geschichte der Nationalökonomie und des Socialismus. Berlin, 1871.

本書の取扱ふ所は表題に背くことなきも今日の所謂統一的發展史的に經濟學の變遷を觀察せざるの憾なきにあらず。

Eisenhart, H— Geschichte der Nationalökonomk. Jena, 1881.

一八五六年よりハーレ大學教授たり。

本書は第二編自由主義の時代を論ずるに當り、十六頁を以て極めて簡潔にスミスの生涯及學說を論述せり。

Farrer, J. A.— Adam Smith (London 1881)

本書はアダム・スミスの傳記及倫理觀を論述せるものなり。

Feilbrgcm, Siegmund— Smith und Turgot (Wien 1892)

本書はスミスとチュルゴーとの關係及スミスとフヰジオクラートとの關係を論究せる一七〇頁の小冊子なり。

Gide, Ch. et Rist, Ch— Histo.re des Doctrines Economiques depuis les Physiocrates jusqüa nos Jours Paris 1909)

近世經濟學史中にありて傑出せるものにして本書のスミスに關する章は現巴里大學部教授たるリスト氏の執筆に係る、四節に分ちて分業論、スミスの自然主義と樂天主義、經濟的自由と國際貿易、スミスの思想の影響と其普及とを論ず。一九二二年訂正增補第四版發行せらる。

Haney, Lewis H.— History of Economic Thought. New York, 1910.

本書は古代より現代に至る經濟思想を研究せるものにして、經濟學の建設者としてスミスを論ず。行文極めて平明なり。一九一九年訂正增補版出づ。

Hasbach— Allgemeinem Philosophischen Grundlagen der von Quesnay und Smith begründete Politischen Oekonomie. (Leipzig 1890)

著者は一八九三年よりキール大學經濟學教授たりし人にして、スミスによりて建設せられたる經濟學の哲學的基礎を論述せる著作として最も卓越せるものなり、

Held, Adolf von— Adam Smith und Quetelet.

本論文はブルノ・ヒルデブランド編輯「國民經濟學及統計學年報」第九卷（一八六七年）に掲載せられし三十頁の論文にして經濟學の創始者としてのスミスと近世統計學の代表者としてのケトレーの關係を論述せる有益なる研究なり。

Held, Adolf von— Zwei Bücher zur Socia'e Geschichte Englands. Zeipzig 1881.

著者（一八四四—八〇年）は一八八〇年ボン大學よりベルリン大學に招聘せられしが同年八月瑞西旅行中 Thun 湖にて不慮の溺死を遂げし人なり。本書は一八七五年六月より八月に亘れるロンドン滯在中の研究によりて準備せられし大著作の一部をクナップが編纂せしものにして、英國に於て、英國產業史の研究と正統派經濟學文獻を產める環境の研究とを、復興せしむるに與りて力ありしものと稱せらる。前編は「國富論」より選擧法改正法案に至る五十六年間の思想史及文獻史を陳べ、後編は英國產業初期の歷史と近世工業の發達を論ず、而も前編は後編よりも永久的價値を有するものと稱せらる。

Hildebrand, Bruno— Die Nationalökonomie der Gegenwart und Zukunft. (Frankfurt-am-Mein. 1848)

著者は歷史學派に屬する獨乙經濟學者にして、本書は彼の最も重要なる著作をなし、一八四八年第一卷出づ。第一編、第一章に於てスミス及スミス學派と題し、マーカンチリズム、フヰジオクラートより、リカルドオに及べり。本書は歷史學派に對する重要なる貢獻として觀迎せられしにも拘らず、第二卷は遂に表はるゝことなかりき。

Hirst, Francis E.— Adam Smith. London, 1904.

スミスの全生涯を敍述する傍ら其二大名著たる「道德的情操論」及「國富論」に關する時人、後人の批判並に著者自身の見解をも加へたり。スミスの經歷、環境並に學說の大要を理解するに恰好の入門書なり。

Huth, Hermann— Sociale und Individualistische Auffassung im 18 Jahrhundert, vornehmlich bei Adam Smith und Adam Turguson. Leipzig, 1907.

Ingram, J. K.— History of Political Economy, Edinburgh, 1888.

イングラムは英國經濟學新派の鋒々たる人なり。本著は「エンサイクロペヂア・ブリタニカ」に寄稿したる「經濟學」なる一項を後に至りて增補し單行本として刊行せるものにして、經濟學史を學ぶ者にとりて最も便利なる著として愛好せらる。第五章近世第三期自然的自由主義、英國の部に於いてスミスの學說を論述せり。

Justrow, J.,— Adam Smith, Textbücher zu Studien über Wirtschaft und Staat, Band 3, Berlin und Leipzig, 1919.

本書はスミスの國富論より拔粹して小形敎科書となしたるもの傳記其他の附錄を添へたり。

Jodl, Friedrich,— Geschichte der Ethik in der Neueren Philosophie, Stuttgart, 1889

著者は獨乙の哲學者にして一八九六年以來維納大學敎授。經驗主義の實證論者にして、此實證論を倫理學に適用し一種の實踐倫理的觀念論を樹立せり。本書は彼の代表的著作の一なり。

Kaus, Julius— Die geschichtliche Entwicklung der Nationalökonomie und ihrer Literatur, Wien, 1860.

著者は本書第四篇近世國民經濟學の第一章をDer Smithianismus と題し、之を第一節アダム・スミスの自由産業主義、第二節アダム・スミスと彼の時代及國民經濟學との關係の二節に分ち約七十頁に亘りて論ぜり。

Knies, Karl— Die Politische Oekonomie vom Standpunkte der geschichtlichen Methode, 1883

著者はヒルデブランド及ロッシェル等と共に獨逸に於ける歷史的經濟學派の建設者を以て目せらる。本書は彼の主張を最も明に窺知せしめ得るものにして、初めて上梓せられしは一八五三年なりしが晩年に至りて更に之を補正し一八八三年に再び刊行せられたるものなり。

Lauderdale— A Letter on the Present Measures of Finance, London, 1798.

ジェムス・メイトランド（一七五九—一八三〇年）後にローダーデエル伯爵となり、其個人主義的立場をとる點に於いてアダム・スミスと一致するも、尙スミスの國富論は公の富と私人の富とを混同するものなりとの故を以て非難し、有名なる「公の富の本質と起源」を後に出せる著者が、當時の財政法案に對する意見を發表せるものなり。

（高橋誠一郎氏所藏）

Lange, Friedrich Albert— Geschichte des Materialismus und Kritik seiner Bedeutung in der Gegenwart, 1887

著者は獨乙の哲學者、經濟學に大なる興味を有し深くマルクスに傾倒せり。又後のマールブルグ派に影響する所多し。本書は彼の學名を高からしめたる傑作にして其後叢書中の一

冊として重版せらるゝ事八回。英譯及佛譯あり。

Leser, Emanuel— Untersuchungen zur Geschichte der Nationalökonomie, Jena, 1881

本書は第一編に於いてアダム・スミスの生涯を論述せしが、デュガルド・スチュワートのアダム・スミス傳以來、ジョン・レーのそれの出づる以前に於いては最も優秀なる傳記なり。（小泉信三氏所藏）

Leser, Emanuel— Der Begriff Reichtums bei Adam Smith, Heidelberg, 1874

著者はハイデルベルヒ大學教授。本書は專らスミスの富の概念の研究に力を注ぎしものにして、先づスミスに於いて富の概念の內容を知るに資す可き關係を考察し、次に所得を討究し、而してスミスが最も普通に「富」を說明するに用ひし「土地及勞働の年々の生產物」なる公式を精細に吟味せり。全編一四二頁の小冊子。

Leslie, Cliff— The Political Economy of Adam Smith.

本論文は一八七〇年十一月一日發行の「フォートナイトリイ・レヴュー」誌上に發表せられしものにして、彼の「政治哲學及倫理哲學上の諸論文」（一八七九年ダブリン出版）第三節として再錄せらる。

Lewinski, Jan St.,— The Founders of Political Economy, London, 1922.

經濟科學の起源に筆を起し、主としてフヰジオクラート、アダム・スミス及リカルドオに論及せる極めて要領を得たる學說研究なり。

Marx, Karl— Theorien über den Mehrwert, Stuttgart.

マルクスが資本論第三卷に收むべくして、又其協力者エンゲルスが第四卷たらしめんとして、何れも其業の成らずして白玉樓中の人となるや、豫ねて此事を託されし獨乙社會民主黨の碩學カウツキイに依りて獨立の一書として公刊せられしもの即本書なり。フヰジオクラート及其二三の先驅者より筆を起して所謂通俗經濟學の成立にまで及べり。第一卷Bは「アダム・スミスと生產的勞働の概念」と題して之に費すこと三百頁に餘る。第一卷は一九〇四年十月、第二卷（二部）は一九〇五年八月、第三卷は一九一〇年三月刊行せられしものなり。

McCulloch, J. R.,— Accounts of the Lives and Writings of Quesnay, Adam Smith and Ricard, London, 1859.

本書中アダム・スミスに關する部分（一七一—五一頁）は嘗て「經濟政策に關する諸問題に對する著書論說」一八五三年中に收められたるスミスの傳記にして、再び本書に合卷せられ更にマカロック編「國富論」一八二八年並に七〇年版の卷首に揭げられしものなり。

Malthus, T. R.,— An Investigation of the Causes of the Present High Price of Provisions London, 1800.

マルサスは人口論初版を著はしたる翌年大陸を旅行して歸來したる後右の著作を著はしたり。彼は曰く現今の食料品價格騰貴の主要原因は從來看過せられたるが如しと　而して本書に於いて彼は之が原因を明かならしめんとせり。（高橋誠一郎氏所藏）

Malthus, T. R.,— A Letter to Samuel Whitbread, London, 1807.

一七九八年に初版を、一八〇三年に第二版を出せるマルサスが、一八〇七年に於いて救貧

法に對する意見を發表せるものなり。彼は人口論を著はす以前には救貧法の必要を述べたれども、人口論を大成してより後は、態度を一變し救貧法の効果なきを痛論せるに至れるなり。（高橋誠一郎氏所藏）

Malthus, T. R.,— Tracts, London.

（1）穀物法の効果に關する觀察　一八一五年

（陳列せられたるは第三版、初版一八一四年に出づ）

マルサスは其當時旺に論議せられし穀物關稅の論爭に寡默なること能はずして次の數篇の短篇を公にしたり。第一に本篇に於いて農業保護の贊否の兩說に就いて兩者の均衡を保ちつゝ自由貿易による政治的從屬の恐るべきこと、及農業が工業よりも重要なること等をも述べたり。

（2）地代の本質及騰貴の研究　一八一五年

マルサスは本篇に於いてリカルドオ一派の所謂地代の狹義說に對して廣義なる地代說を立てたり。地代を以て土地生產物代價より耕作に要せし全失費を控除して地主に殘る部分となせる彼の說は實にリカルドオに先立つて地代理論を明白に道破せるものにして、人口原則と共に彼の二大功績をなすものなり。

（3）東印度大學に關する陳述　一八一七年

（4）外國穀物輸入禁止政策に關する陳述　一八一五年

マルサスはスミスの自由主義經濟學を奉じたれども、穀物の輸入に對しては農業保護の立場より強く保護主義を主張せり。（高橋誠一郎氏所藏）

Nicholson, J. Shield,— A Project of Empire, London, 1909.

本書は國防、國內商業關係、對外商業政策等の諸問題を論ずるに當り、アダム・スミスの國富論を以て其基礎となし、主としてスミスの貿易論、植民政策論、帝國主義等を論述せるものなり。

Oncken, August,— Adam Smith und Immanuel Kant, Leipzig, 1877.

著者は有名なる歷史家ヰルヘルム・オンケンの弟にして一八七八年以後瑞西ベルン大學の教授　本書は主としてスミス、カント兩思想家の倫理觀及形而上學說を論じ更に進んで兩者の國家觀に及ぶものなり。

Oncken, August,— The Consistency of Adam Smith, The Economic Journal, Sep. 1897.

本論文は、從來屢々疑問となれるスミスの學說體系の根本に橫はる問題即彼の二大著作たる「道德的情操論」と「國富論」とが其根本原則に於いて相矛盾せる二個の全然獨立せる著作なりや否やを論ぜるものにして、著者に從へば、スミスの經濟學は其倫理哲學の僅かに一部を成すものなりと。

Paymode, G. Du,— Études sur les Principaux Économistes, Paris, 1868.

本書はチュルゴー、アダム・スミス、リカルドオ、マルサス、セー、ロッシ等の生涯並に學說に關する研究なり。アダム・スミスに就いては其第二章に於いて論ぜらる。

Price, L. L.— A Short History of Political Economy in England from Adam Smith to Arnold Toynbee, London, 1891.

本書は別題の如くアダム・スミスより筆を起しトインビイに終る。內容は列傳體にして巧みに英國に於ける經濟學の發達を叙したるもの、其第一章はアダム・スミスを取扱ふ。

Price, L. L.— Adam Smith and his Relations to Recent Economics, Economic Journal, June 1893.

プライス教授は「英國經濟學小史」第一版を出せる翌年即一八九二年八月右表題の講演をエヴンバァロオに於いて行ひ、之を翌年六月のEconomic Journalに載せたり。本論文に於いて主として述べんとする所は、アダム・スミスが少くとも英國各學派の經濟學者によりて如何にして近世經濟學の父と仰がれしかの考察に存す。斯くてマルサス、リカルドオ、クリッフ・レスリー更にアルフレッド・マーシャル（經濟學原理第一版第二版）に至るまでの國富論に對する觀察を示し、且最近に於ける經濟學研究の結果が極めてアダム・スミスの所論と相近きものあるを種々の點に就きて擧示したり。

Rambaud, Joseph,— Histoire des Doctrines Economiques, Paris et Lyon, 1899

本書第三章は「アダム・スミス、ジエー・ベー。セイ、マルクス及リカルドオ」と題し、其第一節をスミスに充つ。

Rae, John,— Life of Adam Smith, London, 1895

デュガルド・スチュワートがアダム・スミス傳を著はしてより、スミスを傳するもの頗る多く、其數凡そ三十篇を數へしと雖も、新なる資料の提供せらるゝこと極めて少なく、僅かにレーザーのスミス傳の傑出せるものありしのみなりしが、ジョン・レーの著に到りては、其叙事精細、詳密を極め、スミスの生涯及其周圍を傳へて餘す所なし。假令若干の點の修正を要すべきものありと雖も、今日に於いても尚本書より優れたるスミス傳あるを聞かず。洵に稀有の力作として尊敬に値すべきものと云ふべし。

Seligman, Edwin R. A.— The Shifting and Incidence of Taxation, New York & London, 2nd ed. 1899.

本書は第二編第二章を The Absolute Theory と題してスミス及リカルドオに論及せり。

Small, A.,—Adam Smith and Modern Sociology, Chicago & London, 1907.

著者は本書に於いて、アダム・スミスに於いては經濟學と社會學との間に何等の反對なきこと、及彼の哲學に於ける二個の組織は總べての特殊的行爲が一の倫理體系の中の從屬的關係にありとの一般概念に基くものなることを明かにせんが爲に、スミスの經濟學體系を研究せんとするものなり。

Stephen, Leslie,— History of English Thought in 18th Century. London, 1881. 2 vols.

近世過渡期に於ける英國の思潮を神學、哲學、倫理學、政治學及經濟學の各方面より仔細に檢討せる名著にして、其姉妹編たる「英國功利主義者」二卷と共に類書中の最高權威なり。スミスに關する條目に於いては其形而上學的思想に對する先驅者の影響乃至類似、「道德的情操論」と「國富論」との關係等に就きて特に卓拔なる觀察を披瀝せり。

Stewart, Dugald,— Account of the Life and Writings of Adam Smith, Edinburgh, 1810.

デュガルド・スチュワート（一七五三年—一八二八年）は一七六五年早くもエヴンバァロオ大學に入り、同八五年同大學倫理哲學教授となれり。彼は倫理哲學に併せて經濟學を講じ多大の效果を收めたり。彼は又始めてアダム・スミスの生涯を傳ふ。即一七九三年一月及三月エヴンバァロオの王立協會に於いて朗讀せる所を更に幾多の脚註を添へ單行書として一八一〇年に出版せられたるもの即是なり。後ハミルトン編纂のデュガルド・スチュワート全集第十卷に收められ又幾度かスミスの諸版本

の卷頭に掲げられたり。

Toynbee, Arnold,— Lectures on Industrial Revolution. London, 1884.

本書は彼の講義案及講演を編纂せるもの十八世紀に於ける英國の産業革命を論じ併せて其經濟學説を明かにす。此點に於いて彼は未だ幼稚なりし英國の經濟史研究上に刺戟を與へたるものとして一地位を占むるものならん。リカルドオの經濟學説其他に關する數論を併せ納む。

Twiss, Travers,— View of the Progress of Political Economy in Europe since the 16th Century. Lodon, 1847.

本書は一八四六年（Michaelmas Term）及一八四七年（Lent Term）にオックスフォード大學に於いて爲せし講義にして全編九講より成る第二講に於いてはマーカンチリズムの起源を述べ、第五講に於いてはケネーの農業論及佛蘭西經濟學派を論じ、第六講に於いてはアダム・スミスの主たる學説を分析し其學説の國富の問題に對する關係に及べり。（高橋誠一郎氏所藏）

Zeyss—Adam Smith und Eigennutz, Thübingen, 1889.

本書に於いては先づアダム・スミス並に彼の祖述者の經濟學説の出發點たる自利心とスミスの「道德的情操論」に現はれたる思想の關係を明ならしめんとす。依りて第一章にてスミスの倫理學説及經濟學説を、第二章にて「自利心」と道德的情操論を述べ、次いで第三章自利心と國富論、第四章スミスの哲學的世界觀を説述す。

四、第十七、八世紀に於ける重要なる經濟書。

Anderson, James—(1)An Enquiry into the Nature of the Corn-Laws: with a view to the new Corn-Bill propsed for Scotland. Edinburgh, 1777.

——(2) Recreations in Agriculture, Natural-History,Arts, and Miscellaneous Literature. 6 vols. London, 1799-1802

著者は所謂地代論の鼻祖と稱せらるゝ人なり地代論は通常 Ricardo の名を以て記憶せらるれども、其中心とも云ふ可き、地代は穀價の一部を成さずとの思想は既に早く Anderson の道破せる所なり。茲に掲ぐる所の（一）は穀法論にして（二）は一七九九年彼によりて創刊せられたる雜誌の蒐錄なり。

Barbon, Nicholas—(1) A Discourse of Trade. London, 1690.

——(2) A Discourse concerning Coining the New Money lighter. London, 1696.

（一）は Barbon が N. B. M. D. なる匿名にて公にされしもの。一九〇五年 Hollander 教授之を翻刻せり。（二）は Barbon の最後の著作にして、Locke の貨幣陞價論に對する反對論として著されしもの、貨幣は法律に據りて作らるゝ價値なり。而して其價値の差は該片の極印及大さによりて知らると云へる法定論者の立脚地に立ち、Locke のそれと相反せる諸般の命題を列記し、而して是に基きて其誤謬を論證せんとせり。

Briscoe, F.—(1)A Discourse on the Late Funds of the Million-Act, Lottery-Act, and Bank of England. London, 1694.

——(2) An Abstract of the Discourse on the LateFunds of the Million-Act, Lottery-Act, and Bank of England. London, 1694

右の書は著者の畫策を提案せるものにして彼

は續いて土地銀行設立を提唱せるなり。

Beccaria— A Discourse on Public Oeconomy and Commerce. London, 1769.

著者は伊太利ミラノの人、Encyclopedia 並に Montesquieu の著書に就いて法律及經濟學を學び、識見時流を拔くものあり。其の經濟政策上より見る時は大體に於て重農主義に屬するものなり。

Bentham, Jeremy.— Defence of Usury, shewing the Impolicy of the Present Legal Restraints on the terms of Pecuniary Bargains. Dublin, 1788.

副題の示すが如く貨幣貸借の條件に法律的制限を附するは產業の發達を阻害する拙策なりと論ず。本書は一七八七年露西亞より友人に宛てたる書翰の連續を以てなるものなるが其中アダム・スミスに宛てたるものは利率最高の制限に關して、アダム・スミスを論破し、スミスをして子弟が師の教義を改善せりと云はしめたりと傳へらる。Bentham の經濟學著書中傑作の一たるものなり。

Davenant, Charles.— (1) An Essay on the East-India-Trade. London, 1697.

著者は交易は其の本質に於て自由なる可きものにして之を制限し拘束せんとする總ての法則は私人の特殊の目的に資するを得べきも公共にとりて有利なる事稀なりとし、交易に關する法規の少きは一國民が商取引に由りて榮えつゝある證左なりと斷せり。東印度貿易に關しては同貿易が平時に於て國家の年收を增加する事大なるを數字的に立證し以て善く東印度貿易を占有し得たる國家は凡ゆる商業界を支配す可きものなりと主張せり。

——(2) An Essay upon the Probable Methods of making a People Gainers in the Ballance of Trade. London, 1699.

此書中に於いて、Davenant は彼の前著「戰費調達論」に於いて主張せる內地消費稅も戰時に在りては頗る合理的に課せらるれ共、平時にありては、一般庶民に最大なる負擔を及ぼさゞるを得ざるが故に平和克復後にありては不適當なるものなりと斷せり。又自由なくんば交易は眞に繁盛なること能はず、巨額なる公債が存在し之れに高利の支拂はるゝ時は外國貿易に對する刺激を著しく減殺するものなりと主張せり。彼は貿易の差額を以て一國が一ヶ年間の貿易によりて得たる純收益なりと見るも特殊國に對する貿易差額を計量し之れを重視して立法的方策の基礎たらしむるの非なるを論じ、一般貿易の差額に着眼せる所 Davenant の見解は所謂「取引平衡」を主張する地金銀主義者流の見解より更に一步を進めたり。交易の自由を主張せる彼の所論は彼が國家干涉より經濟的自由主義の方向に赴かんとせる第十七世紀末の過渡時代を代表する經濟論者なりと稱せらるゝ所以なり。

——(3) New Dialogues upon the Present Posture of Affairs, the Species of Money, National Debts, Public Revenues, Bank and East-India Company, and the Trade now carried on between France and Holland. London, 1710.

本書の結構は一七〇一年の出版に係る彼の著「近時の一ホヰッグ黨員の眞姿」に似たり。一七七一年の全集中には此の本を見出さず。

Fauquier, Francis.— An Essay on Ways and Means for Raising Money for the Support of the Present War, without increasing the Public Debts. London, 1756.

著者は一七五六年以降十二箇年間 Virginia 州

の副總督たり。本書は表題の目的を以て爲されたる租稅論なり。

Forbonnais, François.— Recherches et considerations sur les Finances de France. Basle, 1758.

著者は D'Alembert 及び Diderot の百科辭典編纂に參與せる溫和なる重商主義の經濟學者。本書は二卷千二百有餘頁に亘る大著にして佛蘭西財政史に關する最良の文獻なりと稱せらる。

Locke, John.—Several Papers relating to Money, Interest and Trade, & c. London, 1696.

本書は一六九二年の Locke の匿名の著 Some Considerations of the Consequences of the Lowering of Interest, and Raising the Value of Money. に一六九五年版の兩小冊子 Short Observations on a Printed Paper. 及び Further Considerations concerning Raising the Value of Money を合卷し、一六九六年に至り其の姓名を署して出版したるものなり。（高橋誠一郎氏所藏）

Mun Thomas,— A discourse of Trade, from England into the East-Indies. London, 1621.

第十七世紀英國東却度會社に對する非難が喧囂を極めたる時その非難を明確に辯破し得たるものは本書なり。東邦貿易の齎らす貨物が不必要品ならざるを論じ、東印度會社が此の貿易によつて英國民を利する點を指摘し、外國商品の內國消費を適度に止め自國商品並びに通過商品の輸出を盛大にする時その貿易の差額は國內財貨の充實となるべしと論じ、東印度貿易の利益ある所以を頌せり。（第一第二兩版陳列、第一版は高橋誠一郎氏所藏。）

Maddison, Sir Ralph.— England's Looking in and out, Presented to the High Court of Parliament now assembled. London, 1640.

著者は Cromwell 時代に於ける通貨問題に關する最大の權威と看做されたるものにして、書中第二章に貿易平衡の說を述ぶ。本書は一六四一年に第二版を出し、次いで一六五五年 Great Britain's Remembrancer, looking in and out. てう新題の下に之を改版增補せり。

Mirabeau.—Théorie de L'impôt. Avignon, 1760.

佛蘭西財務行政に對する大膽且つ有力なる攻擊と共に課稅の輕減及び單純化を提唱せり。徵稅受負制度の弊害其の極に達せる當時に在りて此の書は十八版を重ねたりと傳へらる。其の忠告に混ずるに臆面なき威嚇を以つてせる章句は著者の幽閉を導けり。

North, Sir Dudley.— Discourses upon Trade. London, 1691.

自由貿易の原理を叙せる最も初期の且つ最も光彩ある文獻の一なり。特に貨幣利子、鑄貨、貨幣毀損、貨幣膨脹等、貨幣に關する所多し。（高橋誠一郎氏所藏）

Ogilbie, W.— An Essay on the Right of Property in Land. London, 1782.

Ogilbie（一七三六—一八一三年）は Aberdeen 大學教授にして具に勞働者階級の貧乏、無智、窮迫を見、土地所有權を以て總べての害惡の根源と認めたり。彼が自然法則の第一の準則は各人は悉く土地に於て等しき配分を有することにして又第二には人の勞働によりて附加せられたる價値に對して所有權を認むることなり。下層階級の自由と繁榮は前者に懸り、農業技術の完成及社會の富の增進は後者に據る。彼は批判に於ては革命的なれども、改革提案に於ては保守的となれり。（高橋誠一郎氏所藏）

Price, Uvedale.— Thoughts on the Defence of Property. London, 1797.

Petty, Sir William. — Political Anatomy of Ireland. London, 1691.

Petty が死後出版に係る名著にして一六六七年より同七十三年の夏に亘れるその第二回の愛蘭土居住中の産物なり、一七一九年版 Political Survey of Ireland は此の書を訂正增補せるものなり。著者は愛蘭土の貧因と和蘭の富裕とを比較し此の差異は何等の地理的事情によりて然るものに非ずして寧ろ愛蘭土人民の營みつゝある日常生活の單純なるによるものと解せり。國富及び貨幣に關する彼の見解も亦此の書に依りて窺はる。（高橋誠一郎氏所藏）

Physiocrates.— edited by M. Eugène Daire. Paris, 1846.

書肆ギョートン發行主要經濟學者著作集の一部を成すものにして Quesnay, Dupont de Nemours, Mercier de la Rivière, Abbé Baudeau, Le Trosne 等の著作を編集す。（小泉信三氏所藏）

Ricard, Sammuel.— Traité General du Commerce. Amsterdam, 1732.

本書は和蘭の當時の商業狀態に就いて論述したるものにして、卷末に種々の表を掲げたり。

Temple, Sir William. — Observations upon the United Provinces of the Netherlan 's. London, 1672.

著者は學史上 Mercantilist に屬し Child に次いで現はれ學說上其の影響を受くる事尠なからざるも純然たる Mercantilist と見るは當らず。即ち彼は經濟上の萬能藥を人口の稠密に求めたるなり。本書は一六九〇年訂正增補して第五版を公にせり。（高橋誠一郎氏所藏）

Temple, Sir William. — Miscellanea. London, 1679.

本書はテンムルの著作を集輯せるもの（高橋誠一郎氏所藏）

Vaughan, Rice.— A Discourse of Coin and Coinage; The first Invention, Use, Matter, Forms, Proportions and Differences, ancient & modern: with the Advantages and Disadvantages of the Rise or Fall thereof, in our own or Neighbouring Nations: and the Reasons. London, 1675

本書は英國に於ける貨幣論中最初の單行本と稱せらる。（高橋誠一郎氏所藏）

Wheeler, John. — A Treatise of Commerce. Wherein are shewed the Commodities arising by a well ordered and ruled trade, Such as that of the Societie of Merchants Adventurers is proved to be: etc. London, 1601.

右の書は Mercharns Adventurers 商社（最も古き英國の貿易會社）の役員たる著者が其當時論議せられし所謂制規的貿易殊に同商社の必要を疑ふ人のために著はしたるものにして論ずる所は同商社の起源創設、從來の地位並に狀態、其支配統轄及び其維持によりて國家に齎らさるべきを諸利益等に關す。其利益として擧ぐる所同社の秩序ある經營國交並に通商の保全、英國品の輸出增進と價格の維持、外國品の廉價輸入、海運の發展、租稅關稅收入の增加、國王並に國家の榮譽と任務に盡すこと等なりとす。本書は實に近世經濟論中の最も古きもの丶一にして此問題は又東印度會社設立以前に於て最も多く論議せられたる問題たるものなり。

Wood, William. — A Survey of Trade. London,

1718.

本書は四部より成り、貿易の利益を論じ植民政策の必要に及び之に加ふるに貨幣及び地金に關する考察を以つてしたるものなり。

Young, Arthur.—(1) A Six weeks Tour, through the Southern Counties of England and Wales. London, 1768.

Young (1761-1820) は農業に關する記述によつて有名なり。彼は炯眼なる觀察者にして彼の著書により其當時の諸狀態に關する知識を得べきを以て永久的價値あると共に又當時の農事の改良にも貢献する所ありたり。彼は英國各地方愛蘭、蘇蘭、及フランス等を遊歷し、殊に農業を觀察して數種の農業旅行記を著はせり。本書は彼が著はせる旅行記中最も古きものなり。

——(2) The Farmer's Letters to the People of England. London, 1767.

此書は一七六八年に第二版を出だす。Young が著名なる農業視察を發表せる第一の著作なり。彼は本書を著はしてより約四十年間相續いて農業に關する著書を發表せるなり。

——(3) Political Arithmetic. Containing Observations on the Present State of Great Britain: and the Principles of Her Policy in the Encouragement of Agriculture. London, 1774.

本書は Young の最傑作たり、最雄篇たるものにして彼の大農論を窺ふを得べし。彼が此書を一貫して提唱する所は英國の農業が世界に冠たる所以は英國の農業政策其の宜しきを得たるが爲めにして、他の歐洲諸國にして之を模倣せんと欲せんとせば、須く其形體より進んで其の眞原因を究めざるべからずと云ふにあり。

Yarranton, Andrew.—England's Improvement by Sea and Land. London, 1677.

Yarranton に就ては其生死の年月明確を欠くも凡そ一六一六年より同八四年又は八五年に亘る生涯を送れるものゝ如し。或者は彼を以て「英國に於ける經濟學の眞正なる創設者なり」と云へり。殊に Yarranton の右の書は第十七世紀の經濟書中にありて最も特色あるものゝ一なり。而して職はずして和蘭を凌駕し貨幣なくして公債を支拂ひ云々と表題に揭げたるが如き本題號の樣式は實に其當時の流行たりしものなり。（高橋誠一郎氏所藏）

無名氏著、*Britannia Languens*, or a Discourse of Trade. London, 1680.

書題は「疲弊せる英國」の義。英、佛、蘭三國を比較し英國の富力著しく劣れりと觀察し、地代の騰落と國富の消長とを論じ外國貿易に論及して其の振興を主張せるものなり。（小泉信三氏所藏）

無名氏著—A Discourse on a Land-Bank, or Ways and Means to increase the Coin of this Kingdom. 1706.

本書は二論を含む。即ち(一)一銀行に對する提案及考察(二)鑄貨の本質及效用と、該銀行により國民に與へらるべき理由是れなり。